

大分市歴史資料館

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

ニュース

vol.
125
2021.1.23

令和2年度 テーマ展示Ⅱ

大分市の 歴史 図鑑

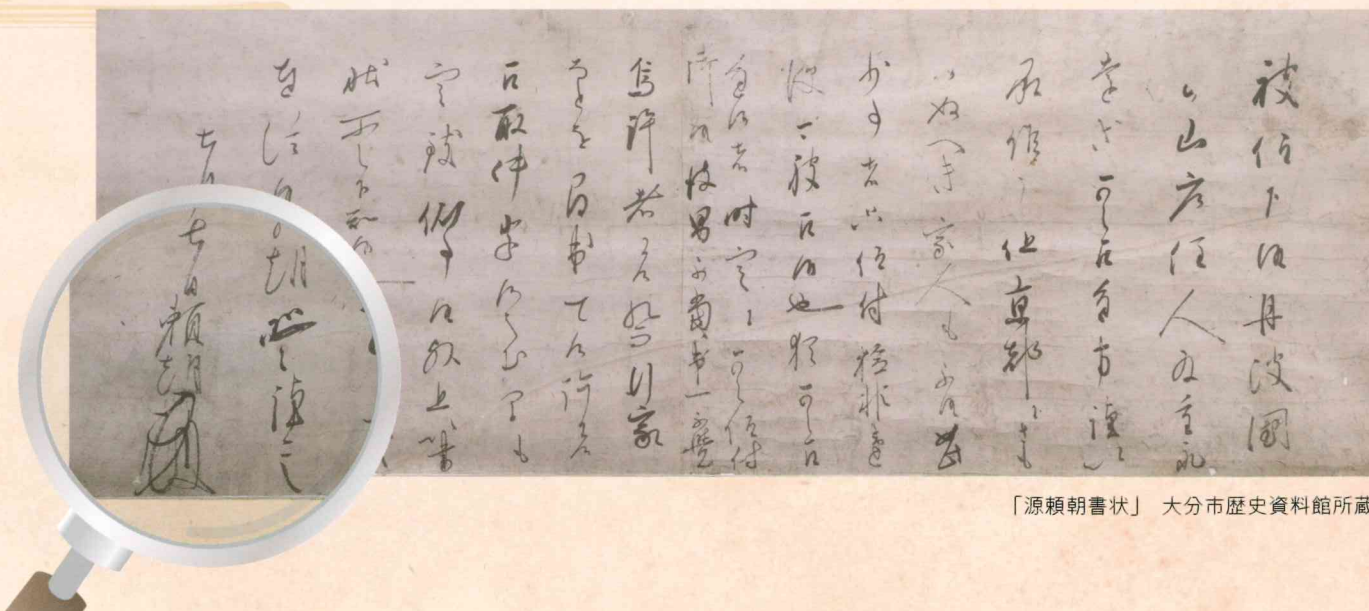
会
期

1月23日 土

3月28日 日



「織田信長・豊臣秀吉像」「先賢古実肖像略写」 大分市歴史資料館寄託



「源頼朝書状」 大分市歴史資料館所蔵

大分市の歴史図鑑

今からおよそ450年前の大分市は、戦国大名の^{おおともすけりん きず}大友宗麟が築き上げた豊後府内のまちがあり、外国から来た人たちが品物で賑わう国際貿易都市でした。その後、府内城をつくる際に、戦国時代の府内のまちを町ぐるみで移したのが府内城下町で、江戸時代には^{さいごくいち}西国一の^{はしゆつ}大商人を輩出する程に商いの町として発展しました。

また、大分市は奈良時代に豊後国の^{こくふ}国府が置かれて以来、大分県の政治・経済・文化の中心地で、数々の歴史や文化が残されています。

今回の展示では、奈良時代から明治時代までのおよそ1200年間の歴史を5つのテーマにまとめ、教科書に出てくる大分市ゆかりの有名な人物とその歴史を、^{ずかん}図鑑のように地図や表などを使って紹介します。



表紙の絵を描いた後藤碩田「後藤碩田画像」(部分) 大分市歴史資料館寄託

第1章

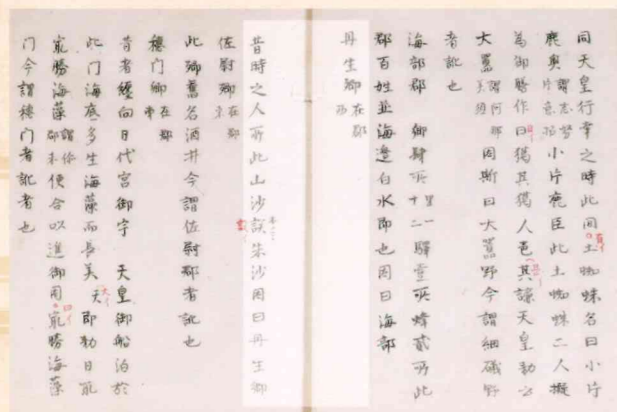
「豊後国風土記」の世界

【奈良時代】

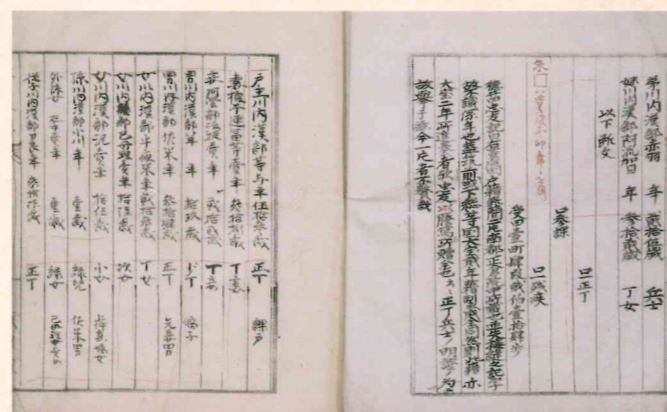
奈良時代の大分市には豊後国の^{こくふ}国府や^{こくぶんじ}国分寺などが相次いで建てられました。豊後の国分寺があった所は大分市歴史資料館(大字国分)のすぐ隣りです。

豊後国の長である^{こくし}国司は、地名の由来や産物をまとめた風土記をはじめ、課税のための住民台帳である戸籍や税金の収支報告である正税帳の3つの公文書を朝廷の命に従って作成しました。

これらの記録が残る全国でも類まれな場所が大分県で、大分市の丹生で赤色顔料が採れていたことや、十二支にちなんだ名前の住民が多かったことなどが分かります。



「豊後国風土記」 大分市歴史資料館所蔵



「豊後国戸籍断简写」 大分市歴史資料館寄託

第2章

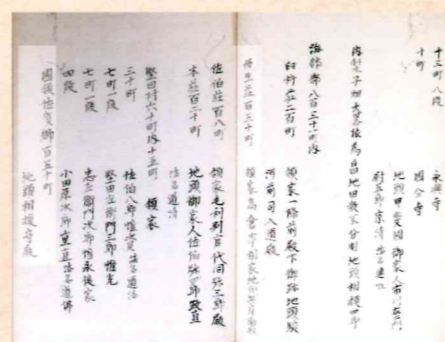
「豊後国大田文」の世界

【鎌倉時代】

鎌倉時代の大分市は、源頼朝が鎌倉に開いた武家政権の波がいち早く及んだ場所で、瀬戸内海航路の要地として頼朝の直轄領となりました。その後、守護所が置かれ、関東の有力御家人である大友氏が豊後国を治めるようになります。

「豊後国大田文」は豊後国の土地台帳で、幕府の要人が重要港湾のある場所の地頭になっていたことが分かります。

また、頼朝の貴重な書状が大分市に残されており、源姓をたびたび使用した宗麟が頼朝との関係を示すため戦国時代に手に入れたものとみられます。



「豊後国大田文」 大分市歴史資料館所蔵

第3章

「府内古図」の世界

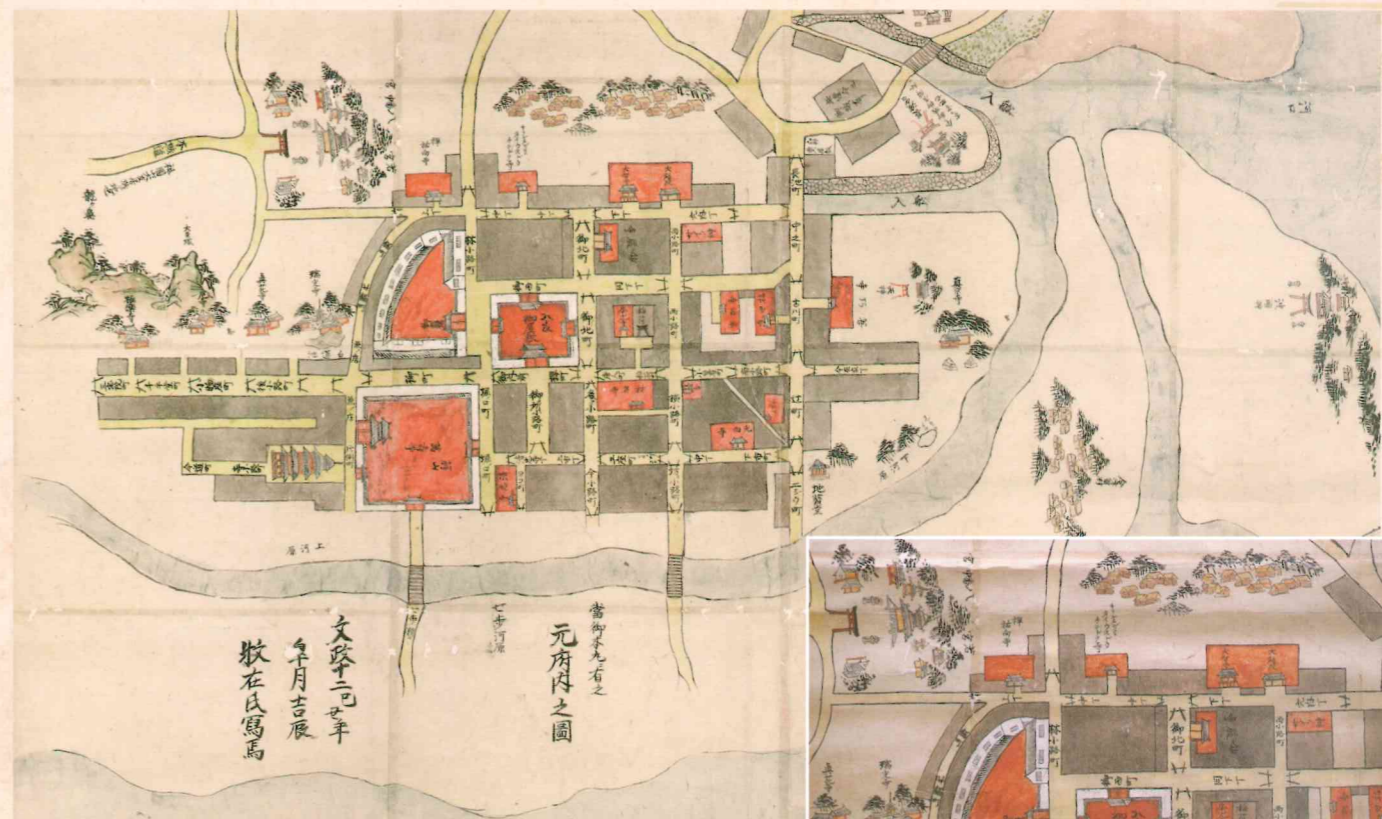
【室町～安土・桃山時代】

豊臣秀吉の命により府内のまちを訪れた四国の武将・^{せんごくひでりき}仙石秀久は、約5,000軒もの家屋が建ち並んでいたと記述しています。「府内古図」はその頃の府内のまちの様子を描いたもので、今の^{けんたくまち}大分市^{けんたくまち}顕徳町周辺に道路で区画された40あまりの町が広がっていました。

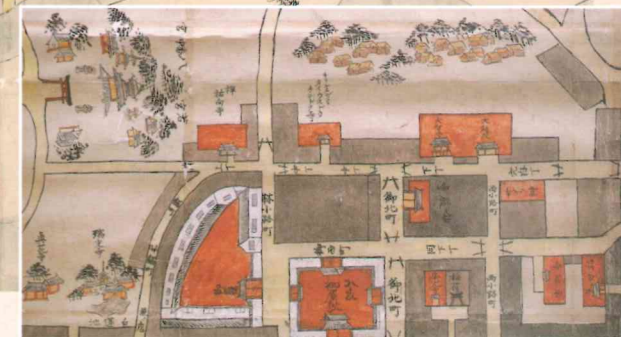
まちの中心には大友御屋敷(大友館)があり、その西側にケントク寺と記されたキリスト教会が建っています。

した。顕徳町の地名は、これに由来するものです。

また、宗麟がザビエルを山口から招き、キリスト教を保護したことを機に^{なんばんぼうえき}南蛮貿易が本格的に開始されました。大友氏が^{かいとうしよこく}対外貿易の最初に選んだのは朝鮮王朝で、『海東諸国記』からは大友氏の家臣や配下の博多商人たちまで貿易に従事していたことが分かります。



「府内古図」 大分市歴史資料館所蔵



同図 ケントク寺周辺部分



「ザビエルの肖像画」 「東洋の使徒フランシスコ・ザビエルの生涯」 大分市歴史資料館所蔵



朝鮮王朝に仕えた申叔舟が1471年に著した『海東諸国記』 大分市歴史資料館所蔵

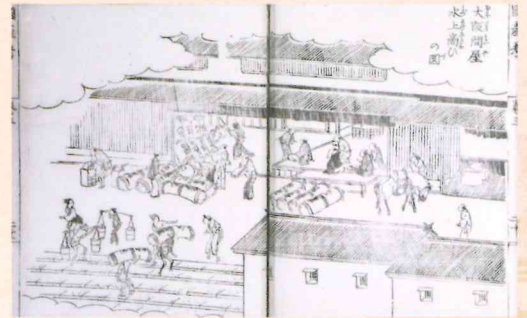


大分市指定有形文化財「御城下絵図」（住吉川に架る仙石橋付近の様子） 大分市歴史資料館所蔵

江戸中期の元禄7年(1694)に豊後を訪れた福岡藩の学者・貝原益軒が「町も頗るひろし。万の売り物備れり。」と称賛したのが府内城下町です。その東の入口付近には、『日本永代蔵』に登場する西国一の大商人・万屋山弥の大豪邸がありました。

益軒がみた府内城下町とほぼ同じ頃の様子を、「御城下絵図」でみることができます。

その当時は、府内の商人たちが西国一円で商いをを行い、七島筵などの特産品が城下に集まっていました。『広益国産考』には、大坂の間屋に水揚げされる府内の七島筵が描かれています。

「大阪間屋水上商ひの図」「広益国産考」
大分市歴史資料館所蔵

日本人初の西洋音楽の作曲家として知られた滝廉太郎は、幼少期の明治23年(1890)頃と晩年に郷土・大分市で暮らしました。明治27年(1894)廉太郎が15歳の時に東京音楽学校へ進学し、その才能は一気に開花することとなります。

廉太郎は22歳でドイツに留学するまで精力的に作曲活動を行い、「荒城の月」や組曲「四季」などの代表作を生み出しました。ピアノを演奏する廉太郎の写真は明治34年3月に撮影されたドイツ留学の送別会での一枚で、直筆楽譜の「花盛」は、廉太郎の最高傑作の一つ「花」の原譜です。

留学前に東京音楽大学で演奏する廉太郎
写真：大分市歴史資料館所蔵滝廉太郎直筆楽譜「花盛」
大分市歴史資料館所蔵